



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第7巻第  
11号)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第7巻第11号). 泌尿器科紀要 1961, 7(11): 1010-1010

ISSUE DATE:

1961-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112209>

RIGHT:

## 編集後記

泌尿器科の学会が 総会も地方会も 年々に盛大になつてゆくのは、頼もしいことだ。それに つけても思うのは 皮膚科との関係である。地方会に於ては 両科がまだ合同して行つてい があるが、それは主に開業医或は両科の分離していない病院の勤務医を対象に考えているよう である。然し それにしては近頃の学会の内容は高級であり 保険診療の事なども あまり念頭 にないから 開業医或はそれに類した医師にとつては 殆んど意味がない。開業上に直接参考にな る学会にしようとするれば レベルを下げねばならぬ。然し特殊な場合を除いて そのような学会 はない。つまり両科の学会を一緒に開く事は 現在及び将来に於て無意味であり 両科は診療科 目としても はつきり分離すべきである。両科を1人で 或は一機関で診療しているのは 両科 とも程度が低いか、又はどちらかの科が、なおざりになつていいると考えられる。

日赤医学 13巻 4号に正木 大森阿博士が「皮膚科と泌尿器科の分離について」と題する文 章を掲げていられる。これは大阪赤十字病院の実状にして 同院は まだ完全とは云えぬが、一 応両科の分離診療を行つており 甲表採用にて 収入の面から見て 両科の分離が無理でないと 云う実績を示し、今後更に完全分離を行うならば 患者の幸福は増し、病院の信用 格式は向上 し 収入も増加するであろうと述べられた。全くその通りであると思う。大病院にては両科の分 離が必要であり 又経営上にも有利である事を 病院当事者は認識するべきである。

大学にては 学問的にも 大学院制度の上からも 又将来の専門医の問題からも 両科分離は 必然であり 着々とその方向に進んでいるが、総合病院にては、なかなか分離がむずかしい。そ れには種々の理由はあるが、結局は昔からの古い考えが、病院当事者の頭の中にある からであ る。両科は1人で診療出来るとか、分離すると経費が懸かるとかの考えである。然し両科を1人 で忠実に診療するのは不可能な事、また両科を分離すれば、収入面からもプラスになる事は、上 に記した如くである。分離すると開業がむずかしいと云う頑固な考えがあるが、それは良心的な 診療を念頭に置かないものである。あまり 開業 開業と云うのはどうであろうか(昭和36年11 月)

### 購読要項

1. 発行は毎月(年12回)とする。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金 100円、払込みは振替口座番号京都4772番 泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名(フリガナ)、住所(雑誌郵送先)、勤務先、職地位、自宅開業の別、 送金方法を御記入の上編集部宛。

### 投稿内規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他、寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400 字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。  
例。中野：泌尿紀要、1：110、昭30。Lazarus, J. A. : J. Urol., 45 : 527, 1941.
5. 300 語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の標題、所属機関名、ローマ字著者名を付け、 なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します。抄録用の原稿を 送ること。翻訳の実費は申受く。
6. 掲載料は4頁迄毎頁 600円、それ以上の頁、アート頁、図表、写真は実費を申受ける。別 冊20部を無料贈呈、それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別 掲載も考慮する。
7. 校正は初校のみ著者校正とし、再校以降は編集者が行う。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院 京都大学病院 泌尿器科紀要編集部。